

霍芝集

二

027
16
2

# 鶴芝集

二編

凡例

- 一 集中の歌仙行ハ二席乃而真書れし  
 以合を論せし
- 一 他句れしありを以てしたるを  
 朱松東の誤なり
- 一 木曾道中記を以て書くを以てするハ  
 柳莊ノ罪なり



鶴芝集

糸編

江戸ニ出板

二編

善光寺ニ出板

三編

松本ニ出板

四編

振方ニ出板

五編

飯田ニ出板

世集を以て其ノ題する所存は  
 初編然見等三編三四五六

編を見ても朱橋の風の骨を  
志流へ一に編を重んずるに  
下は上手にわたり物なるに  
知ぬ下は十午を先時

村舎菴丈北序

日本橋より板橋へ

江戸と出て雨になまむ様は 松兄

戸田の川上たつる川入間村里へ

浦和宿を出れぬ山より大に宿の

こなるまうちの山見ゆ

吹上村より五の峰へ

春雨の朝くあつる藤原に 草池

きりぎりすの鳥く乃 朝郎 松兄

世駟平蓬生山懸谷ち阿了

鳥をたにふる懸谷の境久丸

士朗

志統ては枝買ふ花の木下が

卓池

山と見るとれを弥生の木立草

松兄

二光山赤峰山見ゆるな底者

雛子ゆき猫さよひの縁をふ

双鳥

ちる花は御鳥の林々一風

長妻

武城上野の国境久んたり

雪と方ねみに唱たり河子鳥 士朗

新田皆より新田足利の道あり鳥川阿了

春乃夜の葉の緑れりわさす阿 松兄

内のかげは舊跡の倉ヶ野とてり

音るはくさる野とてり緑の意 士朗

郷系村より妙堂義山とてり

さくさくは名不たふはくさるが 同

席杖や天狗是くれをさる 卓池

碓氷峠

加賀原も碓氷峠も本丸墨 松兄

お子町是を信の国なり

長風の比つともなる山は哉 貞池

侍ありはくぬものや山はく 松兄

将井原より皆掛二里ヨキ阿くくをを場の系

といふに浅間獄のまを野なり

行春や雪のふひ厚。海野山 士朗

子曲川にそいで上田を合を帯如巻の二人と

あぬきく子曲河うひかきを出て越後に合

一水美里の情けにたふになふ原甲斐に

可相里阿り越中喜年花琴あつそこ

都の斗入る去序やめはくすうて阿る

くを思ひいて 士朗

あひう糸を出さず越路にいふ阿の

ちんちんりとのを思ひぬここの事

日数ぬれぬ松のあはれもかゝる  
 け春も何々何々松の虫 士朗  
 舟の流し居れ見ゆも一つと 雲帯  
 田中へふ捨る園をの松抱え 卓池  
 羽織のや流る風々ふくまふ 松兄  
 ちまくとふ園さへ三日乃月 帯  
 茅の葉りふ帷一の夜 如毛  
 炬々ふる霞の寝と迹出さす 見

世たふらむし処山を見るる事 朗  
 何々のれまうあたるたむむら 毛  
 もたひひそあよふお教の 池  
 りまをるをささぬ男のまうに 詞  
 流すむく遠里れ 鐘 帯  
 去丸か月れ出さる雪の 池  
 楳たく一灰のむし書をす 兄  
 舟落したちぬとまれとさぬえ 帯



矢代宿於

斗睡亭無り

雲雀鳴や松は海し月の影  
 初くこゑる 松川乃 暮  
 於歌はあゝ童の袖は常々  
 味ををけくくる 三三三  
 軒ハ皆むしーの形のおはる  
 五月の虫をくくくくく  
 斗睡 吐夫 卓池 士朗 松兄

暮てり望田の様に舟かき  
 夢のあゆみに起るあぬん  
 茶の気は咲ははくくく  
 見 朗 池

犀川

犀川の氷やけくくく  
 柳もく夜ハ明たさる海の上  
 早わくはたたくくくく  
 卓池 斗睡 吐夫

三月廿六日古松亭にてすをばりし

ホトハ花の庭を尋ふ乃日こそ  
花は咲出づれをうらも末流をなと

ゆききれ

有暇にあれく魚んを川横 士朗  
下葉子誦る山吹乃 柳莊  
すを束て頬を白ほ赤も高崖 松兄  
紫のかぐたを閑る百もなし 希言  
松うすやいふくもたむ膳の上 卓池

とらうくと仲鳴うす 杜厚  
時自あふ浪海を人のしらもそ 允化  
琵琶かゝ程乃ちうとまなき 文兆  
俤れふくくなくたうり衣 柳司  
四五本竹の枯もそり 柳 士朗  
月代やそ紙の屋敷の流ろとそ 柳 松莊  
いゝ度馬を扱ゆる香るうさ 松兄  
とらうくと束てふゆたを扱らう 希言



芒川邊飯貝の里 松兄  
 珠敷とくそ壁たむふとく 柳莊  
 云つきのあぐ足針立 真池  
 如月乃志も十五の降了 希言  
 西と東つ追分の春 杜厚  
 あくふ統し酒の志も花の中 艸司  
 もく横をたふまちき空 筆

希言言詠維子山吹

久米路の橋かかす庄とぬ

心くくゆりいとを

山吹やくく之路は橋か見く花を 士朗  
 や月乃目根ともいぬ春風 松兄  
 志くそをたひきてあぐりき外登 真池  
 遠里やひと書きて維子如唱 杜厚  
 夜のそく書まつ維子とく花を 艸司

菜畑の中へもまきくれば  
山吹の色香を通し朝日か  
文兆

遊壽福山各詠

藤義

物の中へに藤の葉はく世松か  
蓋は花二日咲ては体がり  
旅人の鐘とつゝ也あらは花  
よりの系本は若葉をせう藤の毛  
士朗  
松兄  
卓池  
東文

吾れは茶畑をかつよ昔か  
見ふ乃まはつ葉なる茶の毛  
青くくまふもちり藤は茶  
物中の葉をすく茶はこにたり  
人よもちや葉のまはつ葉の毛  
あきさし松の葉あり物ち茶衣  
きく藤や一里出てもその外  
嘗ていつもやむそふちの花  
五竹  
宋路  
素十  
一董  
良史  
岐山  
如薫  
希言

藤吉白の二月廿八日之行程二百里半時  
佛前子坐すももりの外に又三月廿八日  
有る善光寺此如事家に通ずる化を  
報す者禊ぐに百日の歩きををまひ  
あやまらざる祖師の志日に造り  
晨初一時乃は徑を歩くと是す  
不思義なる善なり

朝の辰二重初くせあひる 松月

月佛位の一善女ころにあり 阜池  
通和にもりす。念仏の教を松風に  
たたく地ひらく心明また純は  
老る人半よこす。薄は佛のまじら  
せたさくはと見はけり。あれも藤の  
衣くらねん気色もなく。まうほひ出て  
群集し。いそがしくありき。

朝をく気掃出しはまゝ 士朗

むし柏崎角の光おかしき寺の  
かまを破くあたまを今世は男か  
まに登る佛と近くおす。ゆと女  
又和東の住持

五十鈴川流きなれおあれ  
ワレふこれおあにやらん  
かふふ。事な。男ひあせ。士郎  
いひあふ。あ。あ。あ。

九化きり無り

は春字

春はねほとあなもはな  
行春の山と山々に押流きて 士朗  
はるはねほおまよ。た。ま。い。 卓池  
ゆく春ともは尾張のおら。と。い。ふ。乃  
か。三。枝。と。戻。め。ふ。有。明。に。あ。れ。は。な。ん。と  
い。い。出。の。お。傍。も。な。く。あ。ら。ん。今。は。唯。素。樞。の

馬場の目につくといふ所をたふし  
岳輜上人が馬のあつとよろこぶて  
不とまはるゝや出まゝのふり 希言

席上探題

市井公国を告ぐるいふ所  
火と無せハそつちをくまらぬ鴨牛 同  
今時分入梅やあつらんつふり 柳莊  
まゝ敷子や漁公翁の家にあつむく 同

事も跡生乃き流尾まりの  
士郎の我が家に旅寐し  
たすひさきに道の程はおつちや  
あり事や本音及中り軽記と  
いふものを卓也れ神速たりと  
重なりしむるが路のたつとぬれ  
時を感しそつちをたつとぬれ

あつちをりたつちをり  
かの行程記乃じや  
ふりまふこ梓ふものせもふ  
あつちにおりたつちをりたつちをり  
士朗れえきまふりたつちをり  
是をあやしきまふりたつちをり  
りまふりたつちをりたつちをり

されぬ女君  
むらさきの  
吐文斗睡あひし

享和辛酉初夏

柳在

朱梅翁乃弟也書之松先ありた亦  
 舟池何重高の事江梅と久良也書  
 ありむく然今亦名を正しはるたれ  
 詞伯と評せ舞小の三の舞朱梅翁を  
 閑くもいと多き也

澤  
 重  
 希  
 誌



